

脳梗塞におけるアディポネクチンおよびミエリン塩基性タンパクの臨床的意義  
○藤波 綾<sup>1</sup>, 庄司 正子<sup>2</sup>, 夏目 重厚<sup>3</sup>, 吉田 泰久<sup>3</sup>, 太田 潔江<sup>4</sup>, 太田 光熙<sup>1</sup>  
(<sup>1</sup>神戸薬大, <sup>2</sup>榮昌会 吉田病院薬, <sup>3</sup>榮昌会 吉田病院 脳神経外科, <sup>4</sup>NHO宇多野病院)

【目的】アディポネクチンは脂肪細胞で産生・分泌される生理活性物質で、血中レベルの低下が動脈硬化の進展に関係し、将来の脳梗塞を予測するバイオマーカーとなりうる事が報告されている。一方、梗塞時の脳内で生じた神経組織の障害程度を推定できるものは脳画像解析以外に知られていない。今回、多発性硬化症の障害度マーカーとして臨床応用されているミエリン塩基性タンパク(MBP)に注目し、脳梗塞の臨床病型とアディポネクチン、MBP および入院時臨床検査データとの関連を調べ、これらが脳梗塞の発症や進展、重症度を示すバイオマーカーになりうるかを検討した。【方法】当院入院中のラクナ梗塞(以下、ラクナ)患者60名(男/女=39/21)、アテローム血栓性脳梗塞(以下、アテローム)患者53名(男/女=34/19)、心原性脳塞栓症(以下、心原性)患者40名(男/女=23/17)を対象とした。アディポネクチンおよびMBPは自家製ELISAにより測定した。【結果】(1)脳梗塞病型分類とアディポネクチンとの関係:心原性、ラクナ、アテロームの順で、アテロームが最も低値を示した。さらに、心原性において血中アディポネクチンは動脈硬化指数とのみ負の相関を示した。(2)脳梗塞病型分類とMBPとの関係:入院時血中MBPは3群間に有意差はみられなかったが、入院期間中の最大血中MBPは、心原性が2群に比べ有意に高値を示した。【考察】血中アディポネクチンは心原性において関連が弱かったことから、アテロームとラクナ病型においてバイオマーカーとなる可能性が示された。一方、血中MBPは心原性が他病型よりも有意に高値を示し、損傷を受けた脳病巣が他の2群より大きいことと一致する結果であったことから、脳梗塞における新規のバイオマーカーになりうる事が示唆された。